

# 秋

は、月が美しく見える季節だ。 牙え牙えとした夜の大気の中に浮かび上がる月は、ほかの季節よりもその輝きと大きさを一層増しているかのように見える。

初めて、サハラ砂漠で満月を見たとき、その存在感に驚嘆した。月の光で満たされた空には星明かりは消え、真昼のような明るさが滑らかに波打つ砂漠を青白く満たしていた。月が、これほど明るい天体だったことに衝撃を受けた。

なにより、圧倒されたのはその大きさだった。地球のどこから見上げようと、月の大きさに変わりはないはずだとはわかるのだが、それでもこの大きさは尋常ではない。それが証拠に、普段は見えない月の表面の様相だつてはつきり見えるのだ。

僕は鮮烈なその印象をとどめておこうと、スケッチブックを取り出し、砂漠のオアシスに昇る満月の風景をスケッチした。帰ってからスケッチを完成させるため、35ミリレンズを付けた一眼レフのカメラで、風景をパチリと撮影しておいた。

帰国後、楽しみに待っていた写真ができた。ところが、砂漠の月を撮影した例の写真を見て、啞然とし

た。月はどこへ行ってしまったのか。 わざわざ、少し大きめに引き延ばしたというのに、砂漠の夜をあれほど幻想的に染め上げていた、あの大きな月が見あたらない。そのかわりに画面の上の方に、米粒のような光のシミが申し訳なさそうに貼りついている。これが、あの月なのか。なんで、こんなに縮んでしまったのか。

43

## 旅の曲者

### 秋の夜、月を見上げて

文・写真／田中真知 Tanaka Mochi

イラスト／bozen

とはがっかりだった。そこで今度は50ミリの標準レンズを装着して、再度満月のある光景に挑戦した。一般的に、標準レンズは人間の目とほぼ同じ比率で外界の映像をとらえられる、と言われている。だとすれば、今度こそ、あの美しい月が撮れるはずだ。

ところが、結果はまたしても同じだった。米粒ではなく大豆くらい大きさにはなったものの、やはり普段目に見えている満月の大きさとは比べるべくもない。おかし。砂漠でうっとり

しながら見たあの大きな月は、ただの錯覚だったのだろうか。

そして、あるときまたまたま目にした赤瀬川源平さんのエッセイの中で、彼もまた「とてもキレイ」な三日月をカメラで撮り、後で失望するという経験したと書いているのを見た。だが、観察力の鋭い赤瀬川さんは、同じ失敗を何度か繰り返し、その後、ある結論を導き出す。つまり、人間の目はズームレンズのようなものなのだと言うのだ。

「実際に切符売り場を見ているときは50ミリくらいの標準レンズで見ているのです。無意識に。少し上を仰いで、切符売り場と電柱を一緒に見るときには、35ミリくらいの標準レンズで見ているのです。無意識に。そして電柱の先の空に、あ、キレイな月だなあと思

って月を見ると、135ミリくらいの望遠レンズで見ているのです。無意識に」(「寸角の視線」)

なるほど、つまり人間は自分と見る対象との距離に応じて、無意識のうちで視覚のズームレンズを伸ばしたり、縮めたりしているというわけ

である。近くの切符売り場を見ると、きと、遠くの月を見るときとは、無意識のうちにズームレンズの倍率を変えているのである。

ズームレンズの倍率は距離だけではなく、印象の強さによっても左右されるのだろう。砂漠で見上げた満月の印象は強烈だっただけに、おそらく、僕は自分の目に200ミリから300ミリくらいの望遠レンズを当てはめていたのだ。

生理学的には「見る」という認識活動は網膜と光との相互作用によって行なわれている。けれども、その見たものを印象に位置づけているのは主観という自在なズームレンズなのである。

そこで手元にある画集を広げて、そこに描かれた月を観察してみた。すると、面白いことに多くの日本の画家の描く月は、西洋の画家の描く月よりも大きく描かれているのに気が付いた。西洋の画家の中にも、月を大きく描く画家がいなかったわけではない。だが、こと伝統的な絵画となると、日本の絵師の手になる月は、異様なまでに大きい。それは日本の伝統の中で月の占めている存在感が西洋よりも大きいからなのだろう。

画家だけでなく、日本人は概して月という天体を無意識のうちに大きく見ってしまう傾向があるようだ。ど



江戸時代、神路山蒔絵硯箱の蓋に描かれた三日月（左）と、19世紀ロシアの画家アイワゾフスキーの描く月（右）とでは、その大きさの比率がかなり違う。



こかで読んだのだが、日本の子供と西洋の子供に月の絵を描かせると、日本の子供の方がより大きく月を描くという。一方、星の絵を描かせると、西洋の子供の方が大きく描くそうである。光学的なリアリティよりも、むしろ文化的なフィルターを通した印象のリアリティを通して、人は世界を見ているのだ。

同じことは富士山の絵についてもいえる。明治時代、浮世絵に描かれた富士山に魅せられて日本に来た外国人が、実際の富士山を見て、浮世絵との違いに戸惑ったという。何が違うかという、その傾斜の角度である。実際の富士山に比べて、北斎の描いているような浮世絵の富士山ははるかに急角度で上にそびえ立っている。浮世絵ばかりでなく、銭湯の壁に描かれる富士山にいたっても、その傾斜はひととき急峻である。このことは太宰治も『富嶽百景』の中で指摘している。「広重、文晁に限らず、たいいていの絵の富士は、鋭角である。……北斎にいたっては、その頂角、ほとんど



## 田中真知

たなか まち

「プロフィール」1960年東京生まれ。作家・翻訳家。1990年より1997年までエジプト在住。著書に『アフリカ旅物語』（北東部編・中南部編）（凱風社）、「ある夜、ピラミッドで」（旅行人）、訳書にグラハム・ハンコック『神の刻印』（凱風社）、「惑星の暗号」（翔泳社）など。

三十度くらい、エッフェル鉄塔のような富士をさえ描いている。けれども、実際の富士は、鈍角も鈍角、のろくさと拡がり、東西、百二十四度、南北は百十七度、決して、秀抜の、すらと高い山ではない」

日本人である我われは、月という天体は大きくあつてほしいというイメージや、富士山はすらりと高い山だというイメージを実際の月や富士山に投影して風景を見ている。それは現実の歪曲というより、自分たちの心の有り様の素直な現れである。だが、自分で写真を撮ってみるまで、なかなかそのことには気付かないものだ。

試しに、紙と鉛筆で富士山と月を絵に描いてみよう。一説には、描かれた月は人間の無意識の領域の大きさを、山の高さは理想を象徴するともいうが、そんな心理学的解釈にはあまりとらわれずに、心の中にある月と富士山の原風景を見つめてみる。秋の夜長には、そんな戯れも風雅である。